

五年という浅い歴史だけに、やはり注目すべきことと言わねばなるまい。しかも年々に、来館される見学者の態度がしんけんで研究的になってゆくことも記しとどめておこう。

開館翌秋の信綱先生のご遺族の親睦団体小鈴会三十余名の墓参見学をはじめとして、平成元年度には上代文学会の全国大会、二年度には竹柏会「心の花」全国大会が催されたが、この間に、まことに多彩な人々を迎えたのであった。

●学校関係では、皇学館大学国文学部・石薬師高校文学研究部・四日市笹川中学校等。●教育関係では、中勢高等学校書会・岐阜県大和町教育委員会・長野県川上郷教育委員会・岐阜県恵那郡教育長会校長会・津市教育委員会・静岡県浜北市教育委員会・県女性管理職の会等々。●老人会では、東江島・長太・神老会・栄等々。●婦人学級・成人学級では、玉垣・長太・白子寺家・箕田等々。●研究団体では、伊勢市郷土史研究会・静岡吟遊会・桶町読書のつどい・鈴鹿市民ゼミナー・万葉東海道の旅・地域総合研究所・竹柏会心の花・市民歩く会・四日市かるかも会・東京品川歴史博物館・浜松市賀茂真淵記念館・四日市図書館等々である。●個人は枚挙にいとまがない——敬称は略して、学芸の知名士だけに限定してみても、小野寛・浜田滋子・竹尾利夫・波多野和夫・神田典城・西宮一民・清水好子・鈴木一夫・築島裕・林大・五木寛之・佐佐木幸綱・樋口芳麻呂・後藤祥子・新井明・神作光一・榊井幹夫・広岡義隆・春日

井健等々。また奈良薬師寺の高田好胤・鎌倉瑞泉寺の下一真・参議院議員山本正和等々の名も記されている。

入場無料、ストロボを使わねば写真撮影も自由、書棚は常に研究者のために開架されているという開かれた資料館として、心から来館をお待ちする。

卯の花の里だより 浄福寺さんの山門に並んで見上げる高さの佐々木弘綱翁記念碑が建っているのは、どなたもご存知でしょう。刻まれた和歌は、

和歌の浦に老いを養ふ葦田鶴は雲の上をもよそに見るかな

民間歌人として歌道の弘布に生涯を捧げたのみか、その志を長男信綱次男昌綱に伝えて大成させた、偉大な「石薬師のお師匠さま」の心意気が偲ばれるではありませんか。

明治四十一年十月、この碑を建てるまでの石薬師の人々は、大へんな努力で協同しました。その時の記録は私の家にも保存してあります。執筆者は七卿落ちで名高い、今で申せば過激派のお公卿さんの東久世通禧、それだけに明治新政府で重く用いられた枢密院議長になりました。古いお弟子の一人で、翁はこのお方の縁から三条実美に認められたと聞いております。

(石薬師短歌会 大森美枝)



|                  |      |                   |
|------------------|------|-------------------|
| 創刊を祝って           | 市川年夫 | ・鈴鹿市教育委員会文化課      |
| 創刊号編集に当って        | 大杉 順 | (四・五九三・八二・一一〇〇) 順 |
| 展示室だより(竹をめづることは) | 辻 正  | 千五一一三 鈴鹿市神戸一八一―一八 |
| 資料館だより(多彩な来館者)   | 近藤 淳 | ・佐佐木信綱資料館         |
| 卯の花の里だより(弘綱記念碑)  | 大森美枝 | (四・〇五九三・七四・三一四〇)  |
| 信綱一首(一)          | 村田邦夫 | 千五一一三 鈴鹿市石薬師町一七〇七 |

創刊を祝って 教育長 市川年夫

「卯の花の里」と名もゆかしい当鈴鹿市石薬師町の佐佐木信綱資料館は、開設以来五周年を迎えて早くも日本的な存在となって来ました。

第一は、佐々木ひさ夫人を始めご遺族と信綱先生の知友門人からの寄贈寄託により、収蔵陳列品が極めて充実したことでありました。第二にここ数年、上代文学全国大会や、信綱先生の血脈を伝える歌誌『心の花』の全国大会が相次いで催され、その折地元からおみやげとして贈られた卯の花の苗が日本全国にしっかりと根付いたことであります。それは、この施設を拠点として、地域の方々の教養と親睦とが、広く、深く、それぞれの個性を生かして培われた尊い結果でありました。ここに機は熟して、待望の『資料館だより』を春秋二回刊行してゆくことになりました。創刊号は信綱先生の父であり師であった弘綱翁歿後一〇〇年記念「石薬師のお師匠さま」展覧会を紹介し、黎明日本を担った父祖の時代から門出しようと思えます。御支援下さい。

創刊号編集に当って このような紹介連絡の通信小冊子の必要性を、わたくしたちの責任として痛感する程、生後満五年の佐佐木信綱資料館は成長させていただきました。皆さまのお力添えをいただき、地道な試行を重ねてまいります。対象は広く市内外の志有る方々であります。特に小中高校の国語科・社会科や図書室の先生方にお読みいただきたいと思えます。それ程、宿題のテーマ、レポートや卒業論文の資料を探しに見える方々が多くなったからであります。

特に創刊号は弘綱歿後百年特別展を紹介し、多数の方々のご来館をお待ち申し上げます。

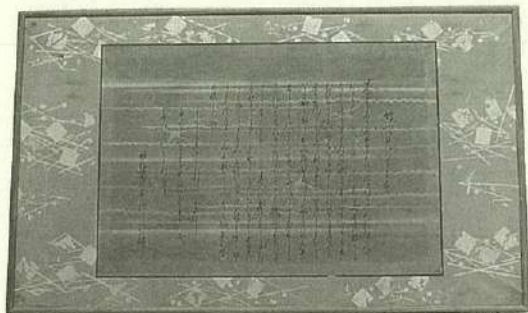
一、主題 石薬師のお師匠さま、佐々木弘綱翁のおもかけ

一、期間 六月二十二日(土)から七月二十日(土)まで、当資料館において。月曜休館。

一、なお、七月七日(日)午後二時から辻正氏が、七月十四日(日)は同じく村田邦夫氏が、陳列品の解説を行ないます。またこの機に弘綱翁の小伝を刊行してお頒ちします。(文化課課長 大杉 順)

展示室だより これから毎号、資料館の収蔵の文章・詠草・書簡等の文献のなから、その折々にふさわしいものを大体この型で紹介していこうと思う。

第一回は弘綱翁記念展に因んで、翁自作自筆の「竹をめぐることば」を選んだ。石薬師文庫開設の時、亡き父の形身と佐佐木信綱先生が寄贈された懐紙大の扁額。典雅に謹書されている。



〈よみ方〉 句読点・濁点を付け、漢字まじりにし、送り仮名も正しく補っておく。

竹を愛づることば

①「木にもあらず、草にもあらず」と昔の人の言ひけん、竹ばかり愛でたきものは、よに有らじかし。春はまつ、鶯の時を占めて、

④ 眺を覚えぬころの眠りを覚まして囁きたる。夏は、生ひ出でたる子のすくすくと見る毎に伸びゆく様のみかは、葉分けの風、はたいと涼し。秋は、葉越しの月のもとさへ光りて、いとさやかなるに、かぐや姫の生ひ出しもかくやと思ひやられ、冬は、雪に掃みたるは言ふべくもあらず。夜深き嵐にしづれ落ちて起き直る音もあはれなり。⑤ かく一年ながら、めでたきを愛でて、世の人の千代の例にすなるは、げにさることにて、年毎に生ひ添はり繁りもてゆくは、親族一家の常盤堅盤に栄ゆるに譬へつべくこそ。あな、めでたの姿や、あな、ゆかしの竹や。よととも空しかるらし。吹く風に任せ果てたる竹の心は 竹柏園の主人 弘綱

〈ことばの意味〉 おだやかでわかりやすい雅文体ゆえ蛇足の感がないでもないが、翁の俚言解（平易な口語の解釈）をまねて解説を付記しておく。

①古今集卷十八「木にもあらず草にもあらず竹のよはしに我が身はなりぬべらなり——読人知らず」による。  
②決して有るまいものよ。③鶯が竹を自分の巣と占有して。  
④唐詩選「春曉——春眠不覚曉 処処聞啼鳥」孟浩然による。  
⑤筍のすばらしい成長ぶりだけだろうか。いやその他にも、の意。⑥葉の間を吹いてくる夕風もまたまことに涼しい。⑦葉を通してさす月光に竹の幹まで

信綱一首・1

ずしんとつよき音して発車する  
関西線の駅のはつ夏

が光って。竹取物語冒頭の「その竹の中にもと光る竹なむ一筋ありける」に抛り、「かぐや姫」を起す序 ⑧こうでもあったろうかと想像され。かぐや姫とかくやは縁語。  
⑨いわゆる雪折れ笹の風情は、何とも表現のしようもない程すばらしい。⑩深夜の意であるが、その底にまだ夜明けには遠いという意味がある。この場合も、寝覚めがちな老いをかこつ思いがひそんでいる。⑪雪の重さで自然と崩れ落ちて。⑫しみじみとした情感が湧くものだ。⑬このように一年中、春夏秋冬の四季すべてを通して。⑭世間の人々が竹を命長くめでたい栄えの例にするということは。土佐日記冒頭「男もすなる日記といふ物」。⑮当然なことであって。⑯繁りつづけてゆくことは。⑰一族一門、血縁につながるすべての人々。⑱いつまでも、とこしえに。永久不変に。⑳たとえることが出来るとも言うものだ。こそを受けたあれの結びは省略されている。  
㉑時世の移ろいと共に。世と竹の節と節との間よとを懸けた。竹の節間が空虚であるように、人の心も淡泊な喜び

に遊ぶようになってゆく。一首の趣旨は、吹く風に任せきって逆らわぬ竹の本心は、時経つに従っていよいよ雑念のない清らかな虚無の境地に到っているにちがいない。⑫弘綱翁は庭に竹柏を植えて師弟協力の象徴とし、雅号とした。  
〈余談〉 翁には晩年になるに従って、いよいよ俗世間を捨てての悟りが深まっていったらしい。それは生涯刻苦の信綱先生とは別な文人的な生き方に近いものであった。この歌において、竹の筒の空虚こそ竹の心のまこと、といっているのはその証である。辞世の一首——

命あらば嬉しからましもしなくばそれもすべなし  
神にまかせむ

なお今後この欄を続けるため、特に大井好定氏・川出和彦氏の教示を仰ぐことであらう。

(文化課 辻 正)

資料館だより 毎年平均四千人の見学者を迎えるということは、このような地味な施設だけに、そしてまだ開館後

昭和十五年刊第七歌集「瀬の音」から。六十一歳以後五年間の作品は多く文化勲章受章。日支事変・皇紀二千六百年式典等々、調べの張った述志歌であるその中に、ボソリと、忘れられたように、この一首はある。初句擬声音四字の字足らずがかもす心内の違和感を、下句でしつとりと鎮静させた佳作。(村田邦夫)